

和尚様

母から電話があった。

母は元気よく、父との毎日の生活を話してくれ
る。

私のことは「元気なの？」と聞いただけ。

あとは母の一方的なおしゃべり。

小さな町の、いつもの光景が目に見えかぶ。

「町内会の公園掃除で、今日は朝から大変だったの
よ」と母は言う。

そのあとで、「そうそう、和尚様が亡くなったのよ」
と突然口調を変えた。

「もうすぐ百歳だったから、大往生だ」と、ようや
く電話を替わった父は言った。

さびしい。

電話はもう切れているのに、私は携帯電話を耳に
あてたままで立っている。

こうしていると、和尚様の声が聞こえてくるような
気がする。

どうして、長いこと寺に行かなかったのだろう。

時には実家に帰ることもあったのに。

寺の裏手、池に咲く睡蓮の花が見える部屋。

座り机に向かつて、筆を動かしていた和尚様。

私が高校生になったら、それまでの「ゆりちゃん」から「ゆりさん」と呼び方が変わった。

「ゆりさんは元気かね」

両親と寺に伺い、向かい合ってご挨拶を済ませるたびに、和尚様は私に尋ねる。

私がおものごころついたときから、おじいさんだった和尚様。

浦島太郎の絵本を読んでもらった時、幼い私は最後の頁の絵を見て、「和尚さま」と言ったらしい。

もともとおじいさんだったから、いつまでもいつまでもおじいさんのままだと、そう思っていた。

私が生まれ育った小さな町は、幕末は有名だったらしい。

明治になってからも、町の人間がたくさん死んだ。寺にある墓地には、戦いで死んだ時、十六歳、十七歳と記されている若者の名前が多く見られる。

「皆さんと同じ年頃なのですよ」

中学の時も、高校生の時も、学校で歴史を学ぶ度に、教師はそう言った。

土地の若者たちには、せめて何かを感じてほしいと思っていたのだろうが、残念ながら、あの当時の私たちは、教師を落胆させていたにちがいない。

盆地の夏は暑い。

しつこい暑さだ。

つい、足が寺に向く。

寺が、学校の近くにあるからだ。

「渋いね」と大人になってから言われたが、なんのこ
とはない。

涼しい場所は、寺しかなかった。

家にも学校にも、冷房のない時代の話だ。

私だけではない。

男子も、部活帰り、寺に来ていた。

十六歳の墓碑銘には特別の感情はなかったが、
私たち十六歳もまた、寺に集まっていたのだ。

和尚様は、本堂で観光客を相手に寺の縁起を話
している。

和尚様の幽霊縁起が聞こえてくる。

蝉の声と一緒に聞こえてくる。

庭をぐるりと回り、池に行く。

水連の花が咲いている

池の後ろは杉木立。

なんだか漱石の小説に出てくるような光景だと、
あの頃は思った。

自分のいる町だけは、相も変わらず明治のままの
ような。

駅の近く、新しくできたスーパーは、どこにもひけ

をとらないと、スーパーの店長だけでなく、母も力説していた。

テレビのコマーシャルで宣伝しているお菓子も売っていたから、明治ではないのだけれど。

高校を卒業する時、和尚様に挨拶をしただろうか。

思いだせない。

今日の仕事は、本当に忙しかった。

打ち合わせを次々にこなして、あと一件。

時間調整のために、私は喫茶店で時間をつぶしている。

この店を、私はひそかに気にしている。

茶一みたいな消えてしまうと困るのだが。

この店は、まだ大丈夫だろう。

先日、外装工事で閉まっている時は、真剣に心配した。

店の前は、五差路になっている。

片側二車線の普通の道路がある。

高速道路の入り口がある。

地下鉄の入口がある。

坂道もある。

店に座って大きなガラス越しに外を眺めていると、

色々な流れが見える。

遠くの県庁所在地まで行く大型高速バスが、高速道路の入口に入っていく。

小さな車が、まるで先導車のようにその前を走る。

高速バスは、ゆったりと曲がる。

地下鉄の階段からひとり、ふたり、と地上に出てくる。

きよろきよろとあたりを見回している人もいる。

地下から出ると、私も方向音痴になる。

道路のこちら側で信号待ちをしている人の数が増えていく。

おしゃべりしている人、携帯電話で話をしている人、

下を向いて信号を待っている人。

信号が変わると一斉に歩き始める。

横断歩道を渡り、左右に分かれ、あるいは階段を降り、地下に消えていく。

何秒後には、私の視界から消えていく。

睡蓮の花が咲き、時には本堂で友達と昼寝をしていたあの夏。

ガラス越しに見える、地下鉄入口に消えていく人の後ろ姿。

和尚様の声。

「ゆりさんは元気かね」

つながらるようでつながらない。

人生は、睡蓮の花が咲き、しぼむ間くらの短さ
かもしれない。